

No. 6

博物館報



重要文化財

しょうかんのりつせう
木造聖観音立像

(写真説明)

この聖観音像は、神埼郡三田川町田手の東妙寺に安置されている重要文化財指定の2軀の仏像の中の1軀である。東妙寺は、奈良市西大寺末の真言律宗の寺院であって、かつては隣接して妙法寺という尼寺が建立され、堂塔が建ち並び法燈は高く輝いていた。この聖観音像は、隣接して建てられていた妙法寺に伝えられてきた仏像であろうといわれている。聖観音は、像高1.07メートルの立像で、絵材の一本造り、彫眼である。右手を垂下し、左手をまげて蓮華を執る。四重蓮華座・蓮華・輪光背は、ともに大正5年の修理の際における後補である。

肩が張り、胸厚く、裳は裾をひいて踝をおおい、膝下には貞観様式の鱗波式の衣文が見られ、綾帯には渦文状の旋転がある。小軀ではあるが、重量感に富んだ仏像であって、県内では他に例を見ない平安時代前期の貞観様式の名残りをとどめる彫像史上極めて価値の高い仏像である。

当館では、東妙寺および文化庁の許可を得て、この仏像の複製品をつくり、展示資料として公開することになった。



重要文化財 木造聖観音立像	1
新確認佐賀県内植物について——(その3)	2・3
東宮堀遺跡出土の銅器	4
大宝聖堂の琵琶	5
夕焼けの海——青木繁作	6
常設展新資料紹介 古唐津系陶器	7
博物館誌、行事案内、博物館コーナー紹介	8

新確認佐賀県内植物について

(その3)

被子植物 (双子葉類)

離弁花

離弁花植物ではスマレ科に新確認植物が7種で、変種、亜種を含めて県内では34種となった。このうちヒノクマスマレは新種として発表された。神埼町日ノ隈山で発見されたのでこの和名がつけられた。キスマレは日本におけるスマレ属の権威者である佐賀市出身の橋本保氏が、鳥栖市朝日山で発見したもので、九重高原に多くみかけられ、また朝鮮、満州、中国山東省に分布している。ホコバスマレは雷山で発見されたが、日本では兵庫県で知られていたスマレである。

ウマノスズクサ科に属するカンアオイのことについては、昔から薬草として民間で採集し、利用されていたことから、薬務課の倉成靖任氏がよく研究している。カンアオイの仲間の生育地分布図もつくりあげている。フタバアオイは植物友の会顧問、須古将宏氏が、東脊振村小川内へ採集に出かけた折に、いろいろの植物を採取し、未知のまま栽培していたものうちから、確認されたものである。この植物は京都市加茂神社の祭に使われる、紋章として蓑やチョウチンに用いられている。徳川家のミツバアオイの紋章も、この植物をデザインしたものである。カモアオイという別名があった、花期は5月である。

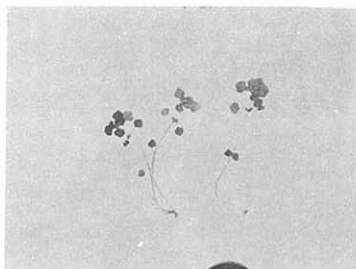
コモウセンゴケは、葉柄1~2cm、日本では、宮城県以西の暖帯に生育し、台湾、中国、東南アジアなどの熱帯に分布がみられる。県内での、この植物の初認は、山下幸平先生が杵島郡北方小学校裏で発見されたもの。

ズミは、初認された天川地方ではヤマリンゴと俗称しているが、九州唯一の産地である。この植物は湿地に自生するバラ科植物で、花は美しい。九州的に珍しい産地として注目されている天川湿地帯は、この地方に特産する巨晶花こう岩の一部である珪石や、加里長石などの採掘道路の造成のため埋めたてられようとしているので、早急に保護の手をさしるべきだろう。

☆——☆——☆——☆——☆

馬場胤義先生は九千部山麓でモチノキの変ったものを採集し、専門家に送られ確認された結果、ナリヒラモチと同定された。ナリヒラモチは、クロガネモチとシイモチの雑種で九州では稀産の植物である。

キツリフネ、シナノキ、ノコバシナノキは佐賀北高校生物部の活躍によって羽金山から出たものである。このうちノコバシナノキは新品種で、シナノキの微細



コケミズ イラクサ科

鋸歯に対し、大きい鋸歯がある。シナノキは東京大学倉田悟先生から存在の連絡があったが、佐北高校生物部によって確認されたもの。キツリフネは羽金山の西南面の山地で、約10アールの群落が確認されている。

離弁花全体で帰化植物の新認されたものが目立ち、とくにこのうちでも欧州から帰化したものが多い。虹の松原で初認されたイタリーマンテマは長崎県野母崎について、本邦第二の産地である。

オランダガラシはクレソンと別称されて、青鮮野菜として都会の店頭にみられる。この植物が三瀬村で野生し、谷川の雑草として繁茂して嫌われている。また近年、土地造成や道路造成のため、芝生が阿蘇高原から搬入されるため、高原植物であるノカラマツ、ツルフジバカマ、ツクシゼリ、ホソバノダケなどがみられる。今後平坦地の植物と抗して、どのような生育変化がみられるかが、興味あることである。



ズミ(バラ科)九州唯一の産地

科名種名	産地など
●ヤナギ科	
144. コウライシダレヤナギ	佐賀市
●イラクサ科	
145. コケミズ	加唐島、呼子町、鹿島市 岩屋山
●ウマノスズクサ科	
146. ウンゼンカンアオイ	春振山地
147. ホソバウマノスズクサ	八幡岳その他名地
148. フタバアオイ	東春振村小川内
●タデ科	
149. エゾノギシギシ	鳥栖市、三田川町(欧州原産一掃化)
150. フトボヌカホタテ	嬉野町今寺
151. ニガソバ	日の隈山(チベット、シベリア原産一掃化)
152. シャクチリソバ	太良町(欧州原産一掃化)
●アカザ科	
153. コアカザ	三田川町目達原(欧州原産一掃化)
154. ヒロハマツナ	鹿島市
●スベリヒユ科	
155. ヒメマツバボタン	佐賀市東与賀町(熱帯一掃化)
●ナデシコ科	
156. イタリーマンテマ	虹の松原(欧州原産一掃化)
157. ノハラツメクサ	佐賀市嘉瀬町
●キンボウゲ科	
158. ノカラマツ	北茂安町中野(搬入)
●ケシ科	
159. ホザキケマン	佐賀市
●アブラナ科	
160. ケジャンジン	北山ダム
161. オランダガラシ	三瀬村岸高(欧州原産一掃化)
162. クジラグサ	伊万里市
●ペンケイソウ科	
163. ツルマンネグサ	山内町
●モウセンゴケ科	
164. コモウセンゴケ	北方町
●ユキノシタ科	
165. ネコノメソウ	御船山
166. タチネコノメソウ	太良町中山、春振山
●バラ科	
167. ヒメキンミズヒキ	各地
168. ヤエザキクサイチゴ	嬉野町
169. ウラジロシモツケ	春振山
170. オビスクラババ	馬渡島
171. ズミ	巖木町天川(九州唯一の産。ヤマリンゴと俗称す)

172. ウスケイチゴ(テリハヒロウダイチゴ)	黒髮山
173. ウスアカノイバラ	呼子町
●マメ科	
174. コメツツメクサ	佐賀市神野町(コーカサス原産一掃化)
175. ヒメヨツバハギ	小城町
176. ツルフジバカマ	北茂安町中野、豆津(搬入植物)
177. ホソバクサフジ	呼子町
178. トキリマメ	白石町稲佐神社
●フウロソウ科	
179. ウスゲケンノシヨウコ	佐賀市本庄町
180. ベニバナケンノシヨウコ	各地
181. タチフウロ	北茂安町中野
●ツゲ科	
182. フツクソウ	多良岳
●モ子ノキ科	
183. ナリヒラモチ	九千部山
●ツリフネソウ科	
184. キツリフネ	羽金山、白坂峠
●シナノキ科	
185. シナノキ	羽金山
186. ノコバシナノキ	羽金山(新品種)
●アオイ科	
187. フユアオイ	唐津市(中国原産一掃化)
●スマレ科	
188. アリアケスマレ	西多久町
189. ケナガバタチツボスマレ	西多久町
190. ホコバスマレ	雷山
191. キスマレ	鳥栖市朝日山
192. フモトヒメスマレ	東春振村
193. ヒノクマスマレ	帯隈山(新雑種)
194. ムラサキコマノツメ	御船山
●ミソハギ科	
195. ホツバヒメミソハギ	上峰村(北米原産一掃化)
●アカバナ科	
196. ムツアカバナ	基山町
197. アレチマツオイグサ	虹ノ松原(北米原産一掃化)
●セリ科	
198. ツクシセリ	東春振村横田(搬入)
199. サケバセリ	伊万里市
200. ホソバナダケ	北茂安町(搬入)
●ミズキ科	
201. キミノアオキ	伊万里市山ノ寺

資料紹介①

東宮裾遺跡出土の銅器

— 杵島郡北方町大崎所在 —



杵島地方の弥生式時代主要遺跡

遺跡は有明海に流れ込む六角川によって形成された白石平野の奥座敷、徳連岳（標高 445.5m）の南麓の低丘陵、標高10mの杵島郡北方町大崎に位置する。

遺跡の南方には六角川を距て、「あられ降る杵島岳を……」という、万葉の歌で知られている杵島山（標高 342m）が南北に延び、この杵島山麓一帯には弥生時代から古墳時代におたる遺跡が密集しているが、弥生時代の主要遺跡としては箱式石棺より内光花文鏡（船載）・素環頭刀子・勾玉・管玉を出土した裾島山遺跡、中国新時代の貨泉を内蔵している甕棺を出土した武雄市紙園社境内遺跡（火災により焼失）、ダム建設の際甕棺群の中から発見された細形銅劍（船載）を出土した朝日ダム遺跡、銅鐙を出土した武雄市溝ノ上遺跡等がある。

東宮裾遺跡は昭和37年11月、水田の耕地整理の際に発見され、水田の地盤を約60cm掘り下げたところで、石蓋甕棺が出土し、甕棺に埋蔵されていた遺物は、星形銅器数個・巴形銅器数個・貨泉7～8枚・広形銅劍1口・管玉3個が共伴したということである。

その後昭和44年になって残存していた星形銅器2個・巴形銅器1個と3個の管玉に注目した県教育委員会は、この遺跡の重要性を痛感し、緊急調査を2回にわたって実施した。

発掘調査の第一次は昭和44年12月3日～4日まで、昭和37年に発見された石蓋甕棺の調査を実施し、第二次は昭和45年3月26日から30日まで、第一次調査地点に近接しておこなわれた。

調査の結果当遺跡より発見された遺物・遺構は、石蓋甕棺2個・小児甕棺1個・石蓋土埴1ヵ所であった。昭和37年時発見の際の遺物の中で、星形銅器2個・巴形銅器1個・管玉3個が保存されていたことは先に述

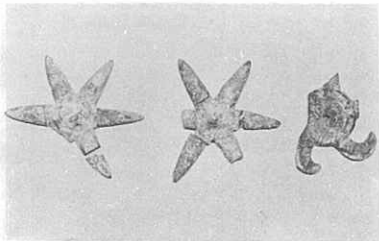
べたとおりであるが、さらに管玉8個が発見された。しかし、貨泉7～8枚と広形銅劍1口は散失していて、その所在を知ることはできなかった。

この東宮裾遺跡については、調査が小範囲にとどまったため、その全貌はつかめないが、やはり集団墓地であったと考えられ、3個の甕棺はともに弥生時代後期初頭の伊佐座式の形状を示し、AD100年～AD200年頃の時期のものと思われ、石蓋土埴も甕棺同様同時期のものと考えてさしつかえなからう。

当遺跡出土の遺物で特に注目されるのが巴形銅器と星形銅器で、巴形銅器は県内において唐津市桜馬場遺跡より3個出土しており、スイジ貝を模して作製されたものと言われ、桜馬場遺跡の甕棺が東宮裾遺跡の甕棺と同時期の伊佐座式であるところから、両者はともに弥生時代後期初頭と考えられるのではあるが、桜馬場遺跡の巴形銅器が6脚を有し、中央部が突起するのに対し、東宮裾遺跡の巴形銅器は前者に比較し小形化し5脚となり、中央部は扁平となるところからやや退化したものといえよう。さらに星形銅器は変形した一種の巴形銅器と見てよくなるかと思える。

このように東宮裾遺跡の巴形銅器と星形銅器は、埋蔵された時期において桜馬場遺跡と同一期と考えられるが、銅器そのものはやや退化し、桜馬場遺跡のものよりやや時代が新しくなるのではなからうか。

さらにこの東宮裾遺跡出土の銅器または、この遺跡に近接する裾島山出土の遺物等から考えて、弥生時代に杵島地方には、大陸文化の影響をいち早く受けた強力な集団が存在していたことが明らかであり、この集団がすでに杵島国とよばれる小国家へと発展していたのではないかと推定される。



銅器

〔参考文献〕

- ・「北方町東宮裾弥生遺跡」新郷土7・8月 柴元静雄 昭和45年
- ・「巴形銅器」考古学集刊4巻4号 杉原莊介 昭和46年

(学芸課 森酔一朗)

資料紹介②

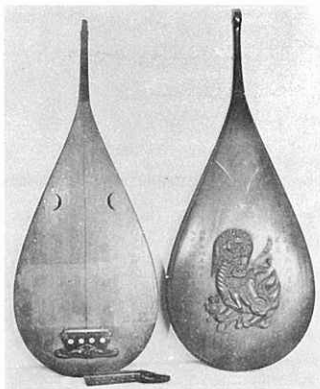
大宝聖堂の琵琶

—大宝聖堂—

聖堂関係資料として当館に破損のひどい2つの琵琶がある。いずれも柄や弦の部分が欠け本体の部分だけがどうにかその面影をとどめている。しかし興味をひくのはその1つの琵琶の胴の部分にある彫物とその左右に彫られた銘である。この彫物は多分親子の唐獅子と思われる。親の背にへばりついてたわむれる如く親の顔を伺っている子獅子。それをぞいでいる親獅子の面持ち。この図柄は親子の情愛を象徴したものであろうか。その細やかな心の動きを一本に彫り込む技量はすばらしいものである。この彫物の右には「肥陽佐嘉郡大寶郡 聖林之樂器。左に「比材自祖先傳孫是為禮奠躬作之以備无疆 武富成亮。と訝えた字で彫られていた。また彫られた胴内には「比材自祖先傳而在於余之家孫是肥陽佐嘉郡大寶郡聖林之樂器也 千時元禄14年8月吉日 慶齋武富成亮」と墨書きしてある。別の琵琶には彫物も銘もないが胴内には同様の意味のことが墨書きしてあり最後に「元禄庚辰辰鐘吉且」（元禄13年6月吉日のこと）とある。つまりこの2つに琵琶の製作者は大宝聖堂の創建者である武富成亮が元禄13年と14年に自分の手で作ったものであり聖堂の楽器として永く使用されていたのである。

武富成亮（1635～1718・字は伯通、市郎右衛門と称し慶齋と号した）は元禄期の儒者でその名は遠く京都まで及んでいた。当時肥前の3名物として「川上流姫社の大楠、長崎港の支那船艀、佐賀の市郎右衛門の親孝行」といわれるほど孝行者の手本でもあった。また佐賀藩で雅楽を拝かにした初めての人もいわれる。記録によると後水尾天皇の面前で琵琶を弾じその音がことさらにすぐれていたので天皇からその琵琶に「孝鳥絃」の銘を賜ったともいわれる。

大宝聖堂は現在の太財町六反田の一角に造営されたもので、その規模はさだかでないがそのいきさつについては「綱茂公御年譜巻之一下」に「町人頭貞服御用聞武富市郎右衛門白山町認在幼年ヨリ儒学仕聖堂相建度旨願奉ル光茂公被聞召古々京都其外諸国ニ聖堂有之トイヘトモ中古以來及退轉當時其例ナキニ依テ公邊被相伺候廻元禄4数於江戸聖堂大成院相建ラレ其末同5年御伺ノ通相濟候ニ付市郎右衛門願ノ通仰付ラレ於太財村聖堂相建…」とあって元禄5年（1692）堂の造



琵琶 97×40

営を始め同7年に落成したものである。成亮はここに自筆の「万古長春」の額を掲げ三聖像の画像を安置し春秋二回釈典を行ったといわれる。三聖像の画は綱茂（佐賀第三代藩主）による孔子像、直之（蓮池第二代藩主）による顔子像、村田政盛（光茂の子、久保田領主）の曾子の像でいずれも各藩領主の自筆による画像を贈られたものであった。さらに「先聖殿」の額を清の部学朱から南門の額「大寶聖林」を朝鮮上護軍李武錫から贈られるなどまさに日韓中三国の学者からなる書画がこの聖堂に掲げられていたのである。堂のかたわらには講堂が設けられその名を「詩経」にある字句になぞらえて「鳶魚齋」と名づけ別に家塾「依仁亭」を設けて子弟の教育にあたった。聖堂をとりまくこれらの建物は実に庶民郷学の殿堂として光を放っていたのである。正徳3年（1713）彼は自筆による「大宝聖林碑」を建てた。その高さは2余の自然石で雲鳥の上に立ち「大宝聖林碑」の五字を篆額として下に自選の大宝聖堂造営に関する碑文があり裏面には「万古長春石」を篆額として下に儒学をたたえた碑文があつて終りに「大日本正徳三歳癸巳八月朔日 後学一郎右衛門武富成亮、稽首百拜」と刻んである。（この碑は現在多久市多久町西溪公園内にある）成亮は享保3年1月26日、82才で長寿をまっとうした。現在太財町には聖堂に関する昔日の面影は何一つ残っていない。付近には入り込んだ建物か並び道路わきのブロック塀の前に場違いのように石柱「太財聖堂址 當武富邸内ニ在リ」が立っている。

ここに現在する琵琶二面と多久市西溪公園の樞の大樹の陰に鎮座する「大宝聖林碑」だけが往時をしのぶ資料として価値高いものである。

（学芸課 尾形善郎）

資料紹介③

夕焼けの海

— 青木繁作 —

音もない夕風ぎの海に、機帆船が一隻、シルエットの中に浮んでいる。帆をたたんでいるのであろうか、それは何処か遠い国籍を想わせて、重く波にのめり込んだ姿が、いかにも物悲しい。

彼の初期の海景のあの躍動するタッチも、のびのある多彩な色彩も今はない。

生き生きとした色彩に変わって、沈んだ色調が、力強く大胆な構図に変わって、落ちついた単純な構図が、写生的な細かい筆使いで描かれており、画面に哀感のこもった情趣を漂よわせている。

サインにある1910年といえは、青木繁28歳の時であり、翌年3月に彼の命を奪う肺患の勢いは、すでに彼に啖血させるまで進んでいた。この「夕焼けの海」は、彼が啖血前に一時唐津で療養している時に描いたものといわれ、彼の絶作とされる「朝日」と一連のものである。

それより3年前、東京府勧業博覧会に出品された「わだつみのいろこの宮」が、彼の自信と期待を裏切って、三等賞の末席に甘んじて以来、父の危篤による帰郷、文展第1回展の落選と、青木の不遇は、決定的な速さで彼を侵していた。

さらに、明治41年10月には、家族とも離別して放浪生活に入り、死に至るおよそ2年ばかりの間、友人や知人を頼って、天草地方や熊本県、久留米、佐賀、小城、唐津などを渡り歩き、貧困と心の荒廃に悩まされながら、苦渋に満ちた晩年を送っている。

ところで青木は、彼の不運のはじまりである「わだつみのいろこの宮」を出品するにあたって、自身で、この作品に対する解說的評論をいくつか残しており、その中の一節に「抑も造形美術絵画の健全な主観的成立には我輩の考を以てすれば一理想の技法、此三要素が在て各矛盾したる鼎の脚の如きもので何れの一つを欠く事が出来ないのである」と述べている。そして「海の幸」は、第一要素の「想」を主としたものであり、今回の「わだつみのいろこの宮」は、第二の「知」を主として制作したものであること、さらに第三の「技」を主とする作品を今後制作するつもりであることを彼は予告し、この三要素それぞれを主体にした作品を描きおえてはじめて、「聊か芸術の良心と生存的意義とを有するアーティストに成れて徐々に静かな製作が出



1910年 39.5×50cm 油彩

夕焼けの海 青木繁作

来るだろう」とも言っている。

しかし、「技」を主として「対象を現実の自然に採り所謂写実なる者が如何なる点迄及ぶ可きか」を徹底的に試みる前に、彼は挫折してしまった。

晩年の風景画にみられるように、そこでは、かつての青木の画面に彩られた、みずみずしい情感を思い起こさせるのはごく稀で、むしろ、みじめな写生画に終ることが多かった。

しかも、西洋絵画の変則的な移入は、浪漫主義を定着させる程緩慢ではなかったし、また近代日本の急速な展開は、必ずしも明治末の浪漫主義を支える背景とはなりえなかった。

「夕焼けの海」の写実性は、さすがに青木の天性を思わせるが、やはりここでも彼独自の浪漫的な心情のひとつのパターンがこめられている。

弱々しい黄色と、くすんだ赤や青色が、われわれを捉えるとするれば、それは、晩年の青木の内にまだ燃え続けていた浪漫主義の薄明が、それらの色を通して鈍く発光し続けているからであり、それはまた、われわれの内になお、その光を認めるなにかが蓄んでいるからに他ならない。

常設展新資料紹介

古唐津系陶器

現在展示中の常設の陳列資料の中で、特に注目される古唐津系陶器数点を紹介して参考に供したい。

古唐津系の概要

東松浦地方には、16世紀には早くも朝鮮の陶工達が移り住み、唐津系の本格的な施釉陶器が造り始められたといわれている。

その後安土・桃山時代になると、各地で茶会が開かれ、千ノ利休や古田織部重然らは茶会に使用する好みの器茶を瀬戸、美濃地方でつくらせた。このため唐津系の諸窯もその影響をうけ、従来からの日用雑器のほか、茶器が平行してつくられるようになった。

この以前岸獄の諸窯が廃止されると、岸獄の工人達は、西松浦地方に移り住み、松浦唐津系の陶器の生産を続けていった。

これに加えて、文禄、慶長の役によって、多数の朝鮮人陶工達は、藩主鍋島直茂とその配下の帰陣に伴われ、帰化して県内各地で新たに窯を築いて製陶に従事し、内地工人を含めて、郡窯をなすまでに発展した。

朝鮮唐津碗(岸獄系帆柱窯—東松浦郡北波多町)

唐津系では、もともと一般日用の雑器を制作していたが、桃山末期に入ると茶器もまたそれに平行してつくられるようになった。

この碗は、茶陶意識はなく、濃灰釉の上に鉄釉を流し掛けたもので、微妙な窯変美を見せ李朝的な成形技法が潜在し、唐津陶特有の、ちりめんじわの土味を見せている。

(桃山初期と推定)



朝鮮唐津茶碗(帆柱窯) 径12cm 高7cm

すり鉢(帆柱窯)

全く無造作につくった感じのすり鉢で、黄白の釉も暖かく、内部のすじ目は荒っぽく単調で、日用の雑器であるだけ、当時の工人の息吹が感じられる。

(室町末期と推定)



すり鉢(帆柱窯) 径26cm 高12cm

鉢、緑釉流し楕目文大鉢(武雄系大谷窯—武雄市武内町)

稀に見る大型の三島手様式の深鉢で、つくりは力強く、ややふくらみのある自然な姿は安定感を持ち美しい。

内側は、中央見込に花文を削り出し、上方は、縦、横に詰った縞模様を楕目で削り出し、下方は波形の曲線をゆるやかに表わしている。釉薬は、鉢と緑を上から対面にぶっかけ、自然な流れは楕目文と相まって素朴な調和美をつくり出している。

本品は、慶長末年と云われ、このようなあがりの良好な完全な姿の伝世品はまれである。



鉢・緑釉流し楕目文大鉢(大谷窯) 径53cm 高19cm

緑釉花瓶(金石原窯—伊万里市松浦町)

伊万里の東部には、松浦唐津系の窯が点在しているが、金石原もその中の一つである。

この花瓶は、高さ20cm位の細首の小型のものであるが、よくまとまった落付きを見せ、緑釉を全体にかけず、下方の生地をそのまま見せている心よい小品である。(江戸初期)

元和四年在銘陶片(武雄系川古窯—武雄市若木町)

元和4年(1616)は、有田泉山での陶石発見の2年後である。本品は、川古窯の出土の鉢の陶片で、元和4年2月15日とかけられている貴重な資料である。



緑釉花瓶(金石原窯) 高20.5cm



元昭四年銘入陶片(川古窯)推定 径40cm 高10cm

(学芸課 久保儀市)

博物館日誌

11月30日	土生・久蘇遺跡出土品搬入	1月4日	執務納め式・館内消防訓練
12月2日	佐賀大学緒方先生退官記念展(12月5日まで)	1月11日	執務始め式
12月4日	常設展「佐賀県の歴史と文化展」はじまる	1月11日	伊万里市野口鉄雄氏寄贈「民家模型」展示場に設置
12月6日	「有明海の干かた」と生物」模型1号展示室に設置	1月14日	衆議院事務局次長森野重信氏来館
12月9日	オックスフォード大学	1月15日	成人の日(無料公開)
	オリヴァー・R・イムビー氏来館	1月16日	第1回博物館教室開催
12月27日	東京山口三千也氏より故山口亮一氏の遺作絵画2点の寄贈と70点の寄託を受ける	1月21日	日本美術院展開場(30日まで)
12月28日	大正大学教授 斎藤 忠氏来館	1月22日	第3回研究講座 「日本美術の本質について」 佐賀大学教授 岸田 勉氏

行事お知らせ

事業名	月・日	曜	時 間	備 考
常設展 「佐賀県の歴史と文化展」	3・31	金	9・00から ▼ 16・30まで	佐賀県の自然史、考古、歴史、美術工芸等 月曜休館
佐賀県勤労者美術展	2・5 ▼ 2・11	土 ▼ 金	9・00から ▼ 16・30まで	絵画、写真、書、工芸等
研究講座	2・19	土	13・30から	肥前名護星城をめぐる諸問題 佐大名誉教授 三好不二雄先生
研究講座	3・25	土	13・30から	佐賀県の石造文化について 博物館副館長 木下 之治先生

博物館教室案内

当館では、新しい試みとして、小中学校児童生徒を対象に、博物館に親しみをもたせ、楽しみながら郷土のことを学び、学習意欲向上の一助とするため、博物館資料を中心に博物館教室を開催していますのでご参加ください。

1. 対象 小中学校の児童生徒
(小学校5年生以上に限る)
2. 場所 当館中展示室
3. 時間 14時から16時まで
4. 受講料は無料です。

開催期日および内容

期 日	第一時限 14.00～15.00	第二時限 15.00～16.00
2月5日(土)	自然教室 (佐賀の岩石と化石)	美術教室 (やきもの話)
2月26日(土)	考古教室 (農耕文化の始まり)	歴史教室 (佐嘉藩の大砲)
3月4日(土)	考古教室 (佐賀県の古い寺)	自然教室 (佐賀の鳥)
3月18日(土)	考古教室 (装飾古墳)	美術教室 (絵の話)

小中学校博物館コーナー紹介



小中学校(校長笠原健二氏生徒 977名)では、昨年から県立博物館コーナーが設けられた。

このコーナーは、博物館の役割や、その催しもの紹介をするもので、博物館に生徒が親しむように計画され、好評をえています。

博物館報	第 6 号
発行年月日	昭和 47 年 2 月 1 日
編 集	古 賀 秀 男
発 行	佐賀市城内一丁目15～23 佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社